

2008年度 卒業論文講評

2009年2月 小関 隆志

佐藤美華「過疎地域における医療セーフティーネット」

日本の医療は、かつては国民皆保険と低医療費・高水準の技術を誇ってきましたが、この10年間で極めて深刻な状況に陥りました。「三位一体の改革」による自治体の財政難に加えて、医師臨床研修制度の開始に伴う医師不足、診療報酬の切り下げなどにより、昨今では「医療崩壊」とまで言われる事態になりました。医療問題はマスコミでも大きく取り上げられ、重要な政治課題として浮上してきています。

こうしたなかで、佐藤さんは過疎地域における医療問題に着目し、住民が安心して医療を受けられるシステムをどう築いていけばいいのかという問題意識で、卒業論文のテーマを選びました。医療問題は実にさまざまな背景が複雑に融合して起きていて、また地域や分野によっても状況が少しずつ違ってくるため、下手をすると議論が拡散して焦点がぼやけてしまう恐れがあります。その点、この論文では「過疎地域」を一つのキーワードとして、焦点を絞っている点が良いと思います。

論文の前半では、新自由主義の構造改革路線や、医師臨床研修制度など、政策的・制度的な背景と統計的な推移を丁寧に追って、それぞれの問題点をきちんとまとめているので、筆者の主張が分かりやすくできています。

後半では、特に青森県むつ市のむつ総合病院に訪問し、過疎地域における病院経営と医師不足対策の事例を描き出しています。病院を訪問して、院長さんから直接お話を聞いたことは、佐藤さんにとって大いに刺激になり、学ぶところが大きかったようです。内容的には、論文前半で取り上げた論点とこの事例がリンクしていて、事例としての位置づけがしっかりしているのも、とても良い点だと思います。

医療をめぐる多様な論点を整理し、事例研究をその中に位置付けて論文にまとめる作業は、かなり大変だったと思いますが、佐藤さんはよく困難を乗り越えて努力しました。

佐藤さんは大学卒業後、大学院に進学して引き続きこうした問題について研究を続けるとのこと。卒業論文の執筆をばねにして、今後の研究が発展し、医療問題に一筋の光を見いだしてくれることを願っています。